



Title	苦行としての哲学
Author(s)	岩津, 洋二
Citation	カルテシアーナ. 1991, 11, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66938
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

苦行としての哲学

岩 津 洋 二

人間の形質は進化の歴史をになう遺伝子によって決定されているというのが、生物学の基本的な立場である。ある個体の可能性と不可能性は、遺伝子情報にもとづいて形成された身体的秩序のなかに書き込まれている。意識活動を生み出すのも身体の神経生理機構にもとづいている。しかし、人間の意識はこの身体的秩序からいったん逸脱することによって〈人間的〉なものになった。意識と身体との分離である。この分離によって、生得的な規定性をもつ身体は、〈無意識〉と同じく、意識にとつての〈他のもの〉となる。人間は意識と身体とのこの分離を補償する手段としてさまざまな文化的な仕掛けを考案した。

1

分離した意識と身体とをどのように関係させるかは文化によって多様である。身体の自然性をできるだけ尊重して分離を解消しようと試みる〈自然な〉文化もあれば、西欧におけるように、分離を決定的なものとして固定化し、精神による一方的な身体支配を推進した文化もある。とりわけ人間をホモ・サピエンスと見る近代西欧においては、合理的に思惟する精神こそが〈自己〉であり、〈他のもの〉である身体はこの精神と対立的で、精神が管理し支配すべき対象とされた。身体に依存しない純粹な精神がもっとも望ましい人間の類型となる。西欧の多くの思想家にとっては、身体は

「出来れば無しで済ませたいようななものか」であった。西欧の思惟の歴史をたどってみれば、ギリシア・ローマの古代から、このような精神―身体の二元性の文脈のもとに、〈純粹な精神〉への憧憬が一貫している。精神―身体の二元性はデカルトにおいて始まったわけではなく、デカルトにおいてその伝統が明示的な形で純化され、合理化されたのである。

身体は具体的で不純な存在である。純粹であるためには、身体から離れなければならない。形而下のものから純化されてこそ形而上学は成立するのだ。プラトンの愛は身体の欲望を超えたものとして構想された。精神的なものが卓越しているのはそれが「肉体を離れた独立的な性格をもつ」（アリストテレス）からである。肉体の美しさを謳歌したかに見えるギリシア彫刻も神のごとき姿、したがって抽象化され純化された美を造形したものであったことはよく知られている。また、キリスト教の伝統においては、身体は罪と墮落の源泉であった。神の国における〈身体なき魂〉の至福のときが来るまで、人々は身体的快楽の誘惑を忌避することが求められた。

しかし、現実には、生きている人間の精神は身体から隔絶されえない。そこで当然にも、身体の影響力を最小限にし、精神の純化を企てるためのさまざまな方策が試みられた。宗教的苦行はそのような試みのひとつである。いわば、東洋における苦行が私的な煩惱を離れ、自己を〈空〉として宇宙の秩序と一体化することを課題としていたのに対して、西欧における苦行は身体の意志的な支配によってより純粹な精神（自己）となる試みである。身体的苦痛や欲望を超えることは、身体から解放された強い精神の証しであった。

来世の至福の理念がゆらぎはじめた近代においても、依然として身体は厄介な代物とされた。近代の主導理念である理性にとって、身体に由来する情念はしばしば理性の正しい行使を乱す原因とみなされたからである。理性が身体を支

配することが理性主義の時代の目標となった。近代の自立した個人とは自分が自分の主宰者であるような人間を指すが、これは理性の支配を意味するものであった。

西欧のこの伝統は基本的には現在も続いている。とくにデカルト主義の国フランスでは、苦しい思いをしてまで体を鍛えるのは精神が〈身体の奴隷〉にならないためである、という説明がスポーツクラブの入会勧誘の宣伝文に記されるほどである。スポーツはそれ自体が楽しみであるというより、精神を身体から解放するための苦行である。スポーツは人間を自由にする手段なのである。身体の不調に悩まされている人間は身体に隷属させられることによって精神の自由を失っているというわけだ。

というのも、身体と対立する精神にとって、身体は、無意識と同じく、強制的な命令として、あるいは逆らうことの困難な強い衝動として体験されるからである。身体は精神の自律性を危うくする。十分に強い精神をもちえない多くの人々にとって、精神はしばしば身体の奴隷である。主体としての精神を外部から強制するもの、精神とは独立した作用を展開し精神の自律性の脅威となるものとは〈他者〉である。したがって、精神的な存在である人間が同時に身体をもち、しかもその精神と身体とが明確に分離されていないことは、自己と他者のあいだの境界が不確定で、未分化の状態であることでもある。この状態は、クリステヴァが言うように、〈おぞましきもの〉l'abjecte である。しかし、いかに主体がこれをおぞましさを忌避し、自律性を強調しようとも、〈私にとって他のものである私の身体〉から主体は完全に離反することができない。離反しうるのは意識の幻想においてのみである。

有機体としての人間の精神が身体から影響を受けるというだけではない。他の人間との関係において、人間は身体を媒介としなければ交通することができないのである。他者の思想は通常その身体から発信され、私の身体器官で受信さ

れる。言葉や文字は物理的な現象だからだ。他者の気持ちはその顔の表情や身振りという身体的表象をとおして了解される。精神の分析の専門家たちでさえ、頼りにしうるのは、患者の身体的表現以外にない。精神をどれほど重要視しようとも、私たちが他者の精神に接触しうるのは、その身体を経由するほかない。さらに、人間の意識を方向づけ、その行動を決定づける欲望の多くはもとも身体的次元に属するものである。そこで、ものを按配し、身体的行動を規制することによって、意識内容を条件づけることが可能なのである。人の支配もまた、フーコーが示したように、身体的秩序をとおしておこなわれうる。自由は意識の幻想であるが、その幻想そのものも〈他者＝身体〉から与えられることになる。

このような〈身体の他者性〉についての議論を、もっぱら意識主体の立場から追及した哲学者のひとりがサルトルである。彼ほど、身体について、また他者について語った哲学者は多くないだろう。

『存在と無』の時期におけるサルトルの議論を簡単に要約すれば、こうなる。絶対的な主体である対自存在にとって、身体は意識と物との中間領域にある〈ねばねばしたもの〉*le visqueux* であるが、それ自体としては、即自であり、「嘔吐」を催させるものである。自分の身体が意味をもつとすれば、それは他者にとつての私の身体という位相においてである。私の身体の意味は他者からやってくる。

ここでは、〈身体の他者性〉は二重の意味を担っている。第一に、西欧思想の伝統にそって、主体たる意識と対立しながら、意識に浸食しようとしている、したがって嘔吐によって拒絶反応を示すべき身体が示される。だが、嘔吐が身体的反応であるかぎりにおいて、物としての身体を意識としての身体が拒否している、とも理解されうる。いずれにし

ろ、事実の水準において身体は意識の純粹性や透明性を損なうものである。サルトルの著作には、純粹なものとしての意識に対応する不純なものとしての身体に関するあらゆる語彙が駆使されている。シュザンヌ・リ拉尔は、具体的な存在としての女性の直観にもとづいて、サルトルが〈具体的なもの〉を忌避する多くの例をその用語法を分析して列挙している。(Suzanne Lilar, *A propos de Sartre et de l'amour*, Grasset, 1967)

第二に、身体は他者のまなざしによって意味づけられる。それは主体としての私によって生きられなければならないが、身体の意味が他者からやってくるということにはかわりはない。私が他者をとらえるのが、その身体的表現をとおしてであるように、私もまた私の身体的表現をとおして他者によってとらえられる。身体の意味はまず主体の権能を超えたかたちで主体に与えられるのである。それは私の対他存在を構成する。主体が他者をその身体をとおして意味づけるように、主体は身体をとおして他者によって意味づけられる存在となるのである。

身体は、その存在においても、その意味においても、二重に主体を逃れ、主体と対立的なものとして姿を現す。それゆえ、意識主体が身体を支配するということは不可能な夢である。しかし、意識の透明性、すなわち意識が身体の規定性をこえて自己主宰的であることを、サルトルは最後まで追い求める。

この二重の〈身体の他者化〉という主題に関連して、サルトルの思想的営為がその身体的事実とどうかかわっていたかについて論じたフラン・ブュイジヌの『サルトルの醜女』(Alain Buisine, *Laideur de Sartre*, Presses Universitaires de Lille, 1986) というややスキャンダラスな題名の本がある。

周知のように、サルトルは極度の外斜視で、右目のほとんど見えない小男であった。晩年には見えている方の左目も

衰弱し、ほとんど盲目となった。二十世紀のフランスの一般的な基準から言って、美しいとは言えない外見をもつ男であった。運動神経が発達していたという証言もない。サルトル自身は自分の身体的外見の醜さやその身体的能力の貧弱さについて熟知していた。

この書物のテーマは、サルトルのこのような身体的醜さやハンディキャップという〈状況〉が彼の思想のスタイルおよび内容と無関係ではありえなかったということを示すことにある。身体が健康で思いどおりに動くときには、身体を改めて意識することが少ない（身体の奴隷状態から解放されている）のと逆に、サルトルの意識には絶えず身体的拘束性や視覚の不可能性が襲いかかる。彼は絶えず身体について語り、視線について語る（アメリカのある精神分析家によるとサルトルの作品のなかに *regard* という単語が約七千回も使われているという）。サルトルにおいては、有機体としての身体も知覚器官としての目も価値を低減させられる。彼が身体について語るのは、それがぞっとする我慢ならぬ代物、嘔吐を催させる存在であることを示すためであった。視線について語るのは、視覚器官としての目によってはなにも見えないことを証明するためであった。「私がまなざしをとらえるときには、私は目を知覚することをやめる」とサルトルは語る。

「美しい―醜い」というのは相対的な問題である。言い換えれば、それは他者の視線をとおしてやってくる。したがって、相対的ではあるが、主体によって変更しようのない還元不可能な形で押しつけられるのだ。先に述べたように、身体が他者性を帯びるというのは、たんに身体が主体としての精神の思いどおりにいかず、身体に固有の必然性にしたがって機能し、それゆえ意識主体にとって還元不可能な偶然性に由来するからだけでなく、このように主体の意味が身体を経由して他者たちから還元不可能な形でやってくるからでもある。それは、二重の還元不可能な他者性につきまと

われているのだ。いずれの場合にも、身体は主体としての自己とは分離し、対立する〈他のもの〉として現れる。

この二重性は鏡の経験においてもっとも明瞭に示される。『嘔吐』を始めとするサルトルの文学作品においては、重要な意味をもつ場面だ。鏡を覗き込む。しかし、鏡の中の顔は、それ自体としてはなにも意味しない。それは〈もの〉であり、「身体の還元不可能な偶然性」、「存在の無意味」を現すのみだ。サルトルはそれをしばしば海の怪物のイメージによって表現している。この〈ものとしての顔〉から直接的に自分自身の顔を理解するのは不可能である。社会の中で生きる人間は、鏡の中に、友人たちにそれが現れるような仕方で自分の顔を見ることを学ぶのである。私の顔の意味は他者たちからやってくる。鏡の中の顔は〈自分自身の鏡としての他者〉にほかならない。鏡を見ることはつねにアイデンティティの危機を招きかねないものである。そこに見出すものは、主体にとって異物の肉体か、さもないとすれば、でに否応なく他者たちによって意味づけられた主体である。

サルトルは自分自身の対他存在性についてこう語っている。「鏡の中ではなく、女たちによって私の醜さを発見した」。「私は美しい女性としか外出しない。それは醜い私との一種の均衡をとるためだ」とも語っている。ビュージヌは、自分の醜さについてこれほど自覚的なサルトルが書斎の中に隠遁せず、逆に人々の視線に積極的に曝された理由をその自伝的記述や発言をもとに分析する。

晩年のサルトルのもっとも深い欲望は「他者への透明性」を獲得することであったが、それは「完全な透明性はガラスのようにかえって他者の目に気づかないものになる」からであった。母親の視線は子供にとって自分のアイデンティティを脅かすものになるどころか、それを確立するのに役立つ。幼いサルトルがすべてを母に語っていたように、老いたサルトルはすべてを他者に語ろうとする。サルトルの主体は自己に対して透明であることが特徴だが、他者たちとの

あいだにも互いが互いに透明であるような共同性を打ち立てる願望をもち続ける。そのためにこそ、ドン・キホーテ的な真剣さで、最晩年まで自分の姿を人々の前に曝し続けたのである。意識主体の自己透明性を維持しようとするある種の苦行に似ている。

ビュイジヌが示すのは、サルトルの嗜好や思想の隠された動機である。「隠された」というのは、サルトル自身に隠されているという意味である。その著作や発言や肉体的所与をもとに、精神的にサルトルの真の動機、真の意志を探り出そうとする試みである。そして、それを解読する鍵は、母親の再婚を核とする幼年時代と斜視および盲目という身体的状況に求められる。サルトルの主体はもはやサルトル自身が透明な主体として考えるところにはない。サルトルは彼の意識的選択とは別のところですでに選択してしまっているものとしてわれわれに示される。そして、サルトルの精緻な自己分析そのものも、他者によって、身体性の次元において分析される。

主体の真実は他者の口から語られ、他者によって篡奪される。

ビュイジヌの研究は哲学者や作家の研究においてそれほど特異な方法ではない。サルトルについて書かれたこの研究書も、「身体的な醜さ」を正面から取り上げたということを除けば、画期的なものということはできない。本人には明示的でなかった意図を明らかにすること、言い換えれば他者によって主体を分析し解釈すること、これをもっとも徹底した仕方では推進したのは精神分析学である。このように解読されるサルトル自身が、ジュネやフロベールについて、おそらくは本人には気づかれることのなかった主体の真の動機を解明しようとしている。つねに活動には主体自身には近づきたい動機、第三者による解明を必要とする動機が存在するかのようである。

サルトルは、意識の透明性に対する確信から、〈無意識〉の存在を強く否定するが、そのサルトル自身の確信や否定そのものが無意識的な動機にもとづくものとして解釈されるのである。哲学研究や文学研究においては、解釈されるのはつねに主体にとっては他者のごとき主体である。それをなお〈主体〉と呼ぶこともできるが、しかし少なくともはや自己透過的な主体（コギト）とは言えない。他者たちによる解説を待つ、本人にとっては不透明な〈主体〉である。

コギトの終焉ということが言われて久しい。意識主体から出発するあらゆる哲学は意識主体の根拠そのものを主観のうちに求めるほかない。意識の還元不可能性は当の意識にとってのみ妥当する。しかし、その意識の真の意味は他者によってもたらされ、他者のなかにある。還元不可能な意識主体はひとつの身体的存在として他者化（alienation 疎外）されるほかないのである。サルトルは、「死」とは「私自身についての私の観点に対する、他者の観点の勝利」と定義しているが、他者としての身体に規定されているかぎりでの精神を対象とする精神分析学や人間諸科学の研究はまさしく主体に死をもたらしものである。コギトはおのれの真実から疎外され、死を宣告される。

かくして西欧における精神による身体（他者）支配の理念という伝統は衰退しつつある。構造主義以降の哲学者たちは意識と身体の分離に対して別の戦略をとり、身体（他者）による精神の支配という現実を明らかにする。あいかわらず意識—身体の二元性の枠組みは保持されているが、意識主体の自律性は放棄される。それは西欧的な人間中心主義の崩壊を告知することであると同時に、意識主体にもとづいて形成されるアイデンティティを危機に陥れることもある。

精神による身体（他者）支配という理念にもとづく文化の危機は、それ自体としては、むしろ歓迎すべきことかもしれない。その理念は、自己中心主義、自民族中心主義、人間中心主義の根拠だからである。他方、他者たちのなかに自

己を見出すことによってアイデンティティを確立するような「へうるわしい」文化も存在する。自己と他者の区別を分明なままにしておく「甘えた」文化も存在する。文化の相対性は、西欧近代の世界制覇にもなって次第に人々の目に明らかなものとなってきたのである。それは西欧近代に由来するさまざまな理念が現実の歴史のなかで崩壊しつつあるからにちがいない。社会主義の理想は挫折し、生活環境は地球規模で破壊され、富の偏在は極端なものになりつつある。それが解放された欲望にもとづく産業主義社会の現実である。ここでは、主体は欲望する存在として外的に条件づけられている。もはや私の欲望と他者の欲望をはっきりと見定めることは困難である。

しかし、たとえば「自由・平等・友愛」という近代社会の諸原理は、「自己」を「他者」と峻別する意識主体の自律性に根拠をおいている。それらの諸原理は自然のなかに基盤をもつものではなく、理念として追求されなければならないものである。それらは現実のなかには存在しない。したがって、それらは、意識主体の自律性や透明性と同じように、虚妄であり、幻想であると言うこともできる。しかし、このような確認は、もしその状況を改変する理念を示すことができなければ、無責任なエゴイズムかもしれない。悲観主義的な決定論を招くだけである。

そして、理念は身体的な現実から離れた意識主体の努力のなかからしか生まれてこない。理念を生み出す苦行としての哲学が要請されるゆえんである。